

[報告] 第 26 回 歴史地震研究会参加記 (巡検)

佛教大学大学院 文学研究科日本史学専攻 土田洋一

Participation Report of 26th General Meeting

Youichi TSUCHIDA

Bukkyo University ,96,Murasakino-kitahananoboucho,Kita-ku,Kyoto,603-8301 Japan

§1. はじめに

2009 年 9 月 12 日から 14 日に開催され第 26 回歴史研究発表会(大津大会)に参加させて戴いた。私は今回が初参加であったが、そのきっかけは佛教大学大学院で私の指導を担当していただいている植村善博教授の紹介によるものである。実は歴史地震研究会の会員になったのは大津大会の後で、当初、水害を専門としている私は本大会への参加を本当の意味での見学と位置づけており、大会当日はアルバイトとして運営のお手伝いをさせて戴いていた。しかし地震災害と水害との共通点や相互の密接な関係性の多さに、自分の失礼なほどの軽易な参加意識を恥じ、同時に感銘を受け入会を決意した。自分にとって親和的な報告もあり、歴史地震の研究蓄積の豊富さ、社会貢献度の高さを感ず自分の姿勢を見直した 3 日間であった。

§2. 巡検

「湖西の地震史跡をたずねて」と題された巡検は、浜大津・大津駅集合→①膳所城→②堅田断層→③白髭神社、藤樹の里→④朽木陣屋跡→⑤町居崩れ→⑥葛川明王院→京都駅解散という比良山地をほぼ一周するコースを辿った。

ほぼ毎年、自然災害の被害額が全国で 40 位以下の滋賀県にあって、自然災害への備えの必要性を再認識させるコースである。

バスは少々のハプニングがありながらもほぼ定刻通りに①膳所城に到着、膳所城は湖上交通と東海道の要衝をおさえるために三角州上に建てられた。しかし恒常的に地震や水害に遭い、廃藩置県前の 1870 年に日本で最初に明け渡された。次にバスは②堅田断層のジオスライサー調査地、③白髭神社での記念撮影の後、昼食のため道の駅藤樹の里で停車。館内食堂の“うおさい”にて湖魚を使った松花堂弁当をいただく。休憩をとり④朽木の陣屋跡、⑤町居崩れ、⑥葛川明王院を順に巡った。

なかでも町居崩れは、浅井了意の『かなめいし』の題材となったもので、今村氏の説明によれば、推定崩壊土砂量 1600 万 m、崩壊前河床(標高 275m)から比高 37m の明王院の石段ⁱ(標高 312m)まで浸水したというスケールの大きさに驚かされる。京都駅までは花俺断層に沿う鯖街道を進み、斜面が谷へ張り出す崩壊地形に興味を惹かれた。

§3. おわりに

巡検は勿論、研究発表会や公開フォーラムなど実に内容の濃い 3 日間であったと思う。私はアルバイトをさせて戴いていたため、4 月 14 日に行われた巡検の下見で西山、小松原両氏とご一緒した。両氏とは以前、お話をしたことはあったが、これほど多くご指導いただいたのは初めてである。当日も両氏をはじめ会員の方々はお忙しい中限りある時間を有効に行動されていた。一方、私はうろろと初めて目にする滋賀の地震史跡の写真を撮り研究の第一線で活躍されておられる方々の新鮮なお話を終始メモしていた。あまり大声では言えないが、アルバイトとしてではなく一学生として巡検を楽しんでいた。

末文ながら、決して有能なアルバイトではなかった私を辛抱強くご指導いただいた西山、小松原両氏に心よりお礼申し上げますとともに、このような私を快く迎え入れて下さった歴史地震研究会会員の皆様の益々のご隆盛をお祈り申し上げます。

ⁱ 編者註：寛文の地震による町居崩れで、付近の湛水位を示す「明王院石段」は、本堂真下の石段とこれまで思われており、この標高もその高さである。今回の巡検で、隣接する中世からの神社や山門の建造物がより低い場所にあり、当時水没し被災したはずなのに現存することから、史料中の石段はより低地側にある途中の参道を指す可能性も浮上したので、高さは変わる可能性がある。